時評

物語と歌の関係について

服部崇

歌会の場において「この一首は物語性をはらんでいる」との評を聞くことがある。その際、評者はそのことを肯定的に捉えている場合が多いように思われる。「物語」と「歌」の関係はどのように考えるべきだろうか。今般、髙山花子『モーリス・ブランショ――レシの思想』（水声社、2021）が刊行された。同書を手掛かりにこの問題を考えてみたい。

フランス語の「レシ」（récit）は通常「物語」と訳される。これに対し、「声に出して読まれたもの」、「暗唱されたもの」という「レシ」の古い語用を念頭に、ブランショは叙事詩の朗唱や「歌」と「レシ」とを重ねる。ブランショから「レシ」を抽出する髙山の指摘によって、私たちは物語と歌の近接性に気づかされる。

髙山は、ホメロス『オデュッセイア』においてオデュッセウスが海で遭遇したセイレーンが歌っている歌をブランショが「来たるべき書物」（1957）において「日常の歌」としていることに着目し、次のように書いている。

…「日常的な歌」が、「異質な、いわば想像的な力をそなえた存在によって非現実的に歌われたとき」…言葉のなかに「深淵」が開かれ、ひとは消え去るように誘惑される…（118頁）

その際、髙山は、「現実的なもの」と「想像的なもの」との間の「距離」に着目する。そのことはよい。しかし、本当に知りたいのは、どの程度の「距離」が適切なのかである。ブランショかあるいは髙山にこの点を聞いてみたい。同書では、「距離」の問題は「欠陥」の問題との関連で議論されている。

その「歌い方」が「不完全」で「満足させない」という「欠陥」をもっているがために、「深淵」の開かれる「歌の起源」へとむかう「距離」が生じ、それを「駆けめぐる」という「欲望」があらわれるという構図である。（119頁）

こうした「欠陥」に着目する髙山の論は、「オルフェウスの眼差し」（1953）においてブランショがトラキアの詩人・オルフェウスが死んだ妻を取り戻すために歌った「歌」の失敗に注目している点に関する考察へと発展していく。

…「歌」ははじめから失敗を含んでいる…「歌」を歌う試練が必要なのである。…「永遠の無為の試練」が必要である…（169頁）

髙山のブランショからの引用は「歌」の不可能性に触れるところに着目する。これらは、私たちが作歌を考えることへの示唆を含んでいるように思われる。このように、「物語」と「歌」の関係は、髙山によるブランショ（に対する筆者の解釈）によれば、現実と想像との狭間にあって不可能性への挑戦を不断に続けざるを得ないことを示唆する。本書を読み進むうちに、私たちの作歌への姿勢が問われているように思えた。

最後に、髙山花子の短歌を紹介して筆を置きたい。

・駒場野の春の粒子を吸ひ込んでラ・ラ・ラ退学届出したり
髙山花子「パリ短歌2018」

・コントンタン？（雪が降ってる）くるりんぱ！（エンドゲームの夜のはじまり）
同右「パリ短歌2020」